

沖縄県立芸術大学附属研究所彙報

I 研究業務状況

(1) 2部門以上共通

1. 移動大学 in 波照間島[担当:芸術文化学部門、伝統工芸部門、伝統芸能部門]

「沖縄県立芸術大学移動大学 in 波照間島」

2018年12月8日(土)

会場:波照間小中学校

楽焼陶芸教室 講師:小浜由子 金城彩子

紅型教室 講師:名護朝和

織遊び教室 講師:新田摂子 小野さやこ

絵画教室 講師:関谷理 普天間実佳

彫刻教室 講師:早川信志 福田直樹

琉球舞踊教室 講師:高嶺久枝

空手教室 講師:盧姜威

琉球芸能公演※:伊波留依※ 宮崎花澄※ 仲村里央※ 石嶺莉※

新垣勝裕※ 喜友名可奈子※ 米須緩南※ 仲村佑奈※

運営担当教員:久万田晋 鈴木耕太 高瀬澄子

事務スタッフ:赤嶺知咲

延べ参加人数:99名

2. 沖縄県立芸術大学附属研究所文化講座・沖縄学[担当:芸術文化学部門、 伝統工芸部門、伝統芸能部門]

講座テーマ「琉球・沖縄の技術史」(総合教育科目「沖縄学」としても開講)

募集定員:80名

期間:2018年4月11日～7月18日(毎週水曜日)午後6時30分～8時

第1回4月11日 栗国恭子(沖縄県立芸術大学非常勤講師)

「琉球・沖縄の技術史の現状と課題」

第2回4月18日 山田浩世(沖縄県教育委員会)

「近世における首里王府の技術組織」

- 第3回 4月25日 森達也（沖縄県立芸術大学全学教育センター教授）
「東アジアの陶業技術と琉球」
- 第4回 5月2日 倉成多郎（那覇市歴史博物館）
「琉球・沖縄の窯業技術」
- 第5回 5月9日 柳悦州（沖縄県立芸術大学附属研究所客員教授）
「アジアと琉球・沖縄の織の技術―機をめぐる―」
- 第6回 5月16日 小野まさ子（沖縄県教育委員会）
「王府時代の布をめぐる技術史の現状と課題」
- 第7回 5月23日 新田摂子（沖縄県立芸術大学附属研究所講師）
「王府から近代の織文化
（生産体制・道具・素材・布の種類）」
- 第8回 5月30日 平川信幸（沖縄県教育委員会）
「近世琉球の絵画技法―現状と課題―」
- 第9回 6月6日 栗国恭子（沖縄県立芸術大学非常勤講師）
「東アジアの中の琉球金属技術史」
- 第10回 6月13日 勝連晶子（沖縄美ら島財団）
「近世琉球の医療技術―東アジアの中で―」
- 第11回 6月20日 高良倉吉（琉球大学名誉教授）
「近世琉球の船舶―造船技術の現状と課題―」
- 第12回 6月27日 前田一舟（うるま市立海野文化資料館学芸員）
「近現代沖縄の造船技術」
- 第13回 7月4日 安里進（元沖縄県立博物館・美術館長 /
沖縄県立芸術大学附属研究所共同研究員）
「近世期の漆芸技術研究の課題
―東アジア各地と琉球の技術―」
- 第14回 7月11日 鈴木耕太（沖縄県立芸術大学附属研究所講師）
「近世琉球の舞台芸能をめぐる技術
―舞台構造・装置や道具をめぐる―」
- 第15回 7月18日 麻生伸一（沖縄県立芸術大学全学教育センター准教授）
「技術者・職人と王府」

受講者合計：延べ人数 1322 人

(沖縄県立芸術大学附属研究所 3 階小講堂で開催。)

3. 平成 30 年度沖縄県立芸術大学しまくとうば実践教育プログラム開発事業
[担当：鈴木耕太（代表）・麻生伸一・比嘉いずみ / 専任・兼任教員以外のメンバー：波照間永吉・高良則子・仲嶺伸吾・阿嘉修・西岡敏・仲原穰]
A しまくとうばを用いた琉球芸能実践授業（琉球芸能専攻にて実施）
B しまくとうば講演会「誇らしや しまくとうば」（2018 年 7 月・11 月）
C ハワイ大学ヒロ校・マノア校調査（2018 年 12 月 10 日～15 日）
D 平成 30 年度しまくとうば実践教育プログラム開発事業事業報告会
（2019 年 2 月 16 日）
E 『琉球芸能用語事典（仮）』の編集

（2）芸術文化学部門

1. 地域文化の調査研究
 - a 組踊を中心とした琉球文学の研究 [担当：鈴木耕太講師]
 - b 沖縄各地の伝統文化の調査研究 [担当：鈴木耕太講師]
2. 沖縄文化の比較文化論的研究 [担当：波平八郎教授]
3. 沖縄文化の歴史学的研究 [担当：麻生伸一講師]
4. 沖縄県立芸術大学附属研究所文化講座 [担当：鈴木耕太 麻生伸一]
講座テーマ「古文書を読もう。ひらがな編」募集定員：40 名 [担当：鈴木耕太]
期間：2018 年 2 月 12 日～16 日（月～金曜日）午後 4 時～5 時 30 分
※沖縄県立芸術大学附属研究所 2 階 AV 講義室で開催。72 名が受講。
講座テーマ「古文書を読もう。」募集定員：30 名 [担当：麻生伸一]
期間：2018 年 5 月 7 日～7 月 9 日（毎週月曜日）午後 6 時 30 分～8 時
※沖縄県立芸術大学附属研究所 2 階 AV 講義室で開催。延べ 370 名が受講。
5. おもろ研究会（平山良明代表）開催 [担当：鈴木耕太]

（3）伝統工芸部門

1. 沖縄染織の研究 [担当：新田摂子講師]

- a Museum Der Kulturen Basel での沖縄染織コレクションの調査
2018 年 12 月 17 日～12 月 21 日 柳悦州、新田摂子、平田美奈子
 - b International Symposium 「Arts of the Ryukyu Kingdom」、2018 年 12 月 15 日チューリッヒ大学 柳悦州、新田摂子、平田美奈子、山田葉子
「日本民藝館所蔵の沖縄織物」柳悦州
「Museum Der Kulturen Basel 所蔵の沖縄織物について」新田摂子
「Museum Der Kulturen Basel 所蔵の紅型について」平田美奈子
「那覇市歴史博物館所蔵〈琉球国王尚家関係資料〉の美術工芸品について」
山田葉子
2. 沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館所蔵「柳悦孝コレクション」の資料整理及び調査、展示会の企画〔担当：柳悦州名誉・客員教授、新田摂子講師〕
- a 資料整理及び調査 2018 年 4 月～7 月
 - b 沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館企画展「柳悦孝の絣ー沖縄の絣から造形教育へー」2018 年 10 月 26 日～11 月 4 日

(4) 伝統芸能部門

- 1. 沖縄・奄美の民俗音楽の調査研究〔担当：久万田晋教授〕
 - a 八重山諸島の民俗芸能の調査研究〔8 月・11 月〕
 - b 沖縄本島中部エイサーの調査研究〔8 月・9 月〕
 - c 奄美諸島（奄美大島・喜界島）の民俗芸能の調査・資料収集〔8 月〕
- 2. 日本本土の音楽芸能文化の調査研究〔担当：久万田晋教授〕
 - a 山口県の民俗芸能の調査・資料収集〔5 月〕
 - b 広島県の民俗芸能の調査・資料収集〔12 月〕
- 3. アジア諸地域の伝統音楽芸能の調査研究
 - a 台湾の音楽芸能の調査研究〔8 月、担当：久万田晋教授〕
- 4. 沖縄県立芸術大学附属研究所文化講座
 - a 「バリ島のガムラン音楽」〔担当：与那城常和子非常勤講師、中村由美子〕
2018 年 11 月 30 日（全 1 回）
 - b 「ケチャットのワークショップ」〔担当：与那城常和子非常勤講師、イク

- トウト・ジュイタ」2018年12月21日（全1回）
- c 「ジャワ島のガムラン音楽」[担当: 亀島良泉、与那城常和子非常勤講師]
2019年1月25日（全1回）
- d 「子どものためのジャワガムラン体験講座」[担当: 亀島良泉、与那城常和子非常勤講師] 2019年1月26日（全1回）
- e 「子どものためのバリガムラン体験講座」[担当: 与那城常和子非常勤講師、長嶺亮子非常勤講師、中村由美子] 2019年3月9日（全1回）

Ⅱ 主要研究業績

1) 研究所員主要研究業績（2018年1月～12月）

1. 著者・編書
2. 論文
3. 作品発表・公演
4. 研究発表
5. 解説等
6. 講演・放送
7. その他

2) 助成研究

1. 平成30年度において研究代表者、研究分担者となっている科学研究費研究
 - a 研究代業者となっているもの
 - b 研究分担者となっているもの
2. 沖縄県立芸術大学関連助成券研究
3. その他

(1) 研究所長

久万田 晋（教授、専任教員）

- 1) 4. 研究発表「奄美・沖縄民謡調査資料のデータベース化と活用」（金城厚と合同発表）＜フォーラム型情報ミュージアムによる音楽関連資料の活用＞に関する研究会、2018年3月5日、大阪市：国立民族学博物館。
4. 研究発表「八重山音楽の特徴」創造農村ワークショップ in 石垣市パネルディスカッションにパネリストとして出席・発表、2018年10月18日、石垣市：石垣市立図書館。
6. 講演「島うたサイエンスカフェ『日本民謡大観 沖縄奄美』を聴く 第8回 奄美諸島北部の八月踊りと島唄」2018年1月18日、那覇市：

tomari。

6. 講演「島うたサイエンスカフェ『日本民謡大観 沖縄奄美』を聴く
第9回 奄美諸島南部の行事歌と民謡」2018年2月22日、那覇市：
tomari。
6. 講演「島うたサイエンスカフェ『日本民謡大観 沖縄奄美』を聴く
第10回 総集編・各地域の名人を聴く」2018年3月15日、那覇市：
tomari。
6. 講演「エイサーの歴史と現在」沖縄市エイサーネットワーク構築事業、
2018年8月12日、沖縄市：エイサー会館。
6. 講演「沖縄各地の神祭りと芸能」おきなわ県民カレッジ美ら島沖縄学
講座、2018年10月17日、沖縄県教育庁生涯学習推進センター（沖縄
県南部合同庁舎）。
6. 講演「エイサーの多様性と現代的変容」沖縄県民カレッジ美ら島沖縄
学講座、2018年12月13日、那覇市：沖縄県教育庁生涯学習推進センター
（沖縄県南部合同庁舎）。
6. 講演「エイサーの源流」エイサー大学、2018年12月15日、沖縄市：
エイサー会館。
6. 講演「奄美諸島の音楽芸能と諸鈍シバヤ」文化交流ネットワーク in 沖
縄（APCN in 沖縄）、2018年12月20日、浦添市：国立劇場おきなわ交
流プラザ。
7. 「ロビン・トンプソン氏 JASRAC 音楽文化賞受賞祝賀会によせて」『沖縄
タイムス』、2018年1月18日。
7. 「シンポジウム＜沖縄の人の移動と未来への展望－島嶼・環境・文化
－＞によせて」『琉球新報』、2018年3月10日25面。
7. 記事監修「エイサーヒストリー」『All About エイサー』沖縄市経済文
化部文化芸能課、pp. 6-9、2018年3月20日。
7. 「全体総括」『平成29年度＜沖縄県立芸術大学移動大学 in おおぎみ＞
報告書』沖縄県立芸術大学附属研究所、pp. 41-42、2018年3月23日。
7. 「柳教授退任記念号の刊行に寄せて」『沖縄芸術の科学』（沖縄県立芸術
大学附属研究所紀要）第30号（柳悦州教授退任記念号）、pp. 1-2、2018

年3月31日。

7. 祝辞「京太郎の面影を追って」『第四回比嘉いずみの会 真南風さらめ
けばー鈴鳴りと待ちよー』公演パンフレット、p. 13、2018年5月27日。

7. 談話「沖縄のシンボル」（安室奈美恵引退特集）『読売新聞』、2018年9
月8日33面。

7. 小西潤子の研究発表「《パッサイロン》の系譜」（沖縄国際大学南島文
化研究所シマ研究会）にコメンテーターとして出席。コメント。2018
年10月29日、宜野湾市：沖縄国際大学。

2) 1. a 基盤研究 (C) 「南西諸島北部の民謡旋律の系統に関する発展的研究」
(2016年度～2018年度) 2018年度交付額：120万円（直接経費）

1. b 基盤研究 (C) 「民謡現地調査録音資料のアーカイブ化と公開活用の方
法」（2017年度～2019年度）研究代表者：金城厚（沖縄県立芸術大学
音楽学部教授）

1. b 基盤研究 (C) 「奄美における文化の伝承・創生のメディア的展開とア
イデンティティ形成に関する研究」（2016年度～2018年度）研究代表
者：加藤晴明（中京大学教授）

（2）芸術文化学部門

鈴木 耕太（講師、専任教員）

2. 「組踊における『役名』をめぐって『古典組踊』の役名の概念～女性の
名前を中心に」沖縄県立芸術大学開学30周年記念論集『芸術論の現
在 沖縄からの発信』2018年3月30日

1) 2. 「近代における組踊の様相 ―近代組踊上演史再考―」（掲載予定）沖
縄文化70周年記念論文集

4. 「組踊研究の現状と可能性」2018年12月2日 第59回日本風俗史学
会自由課題研究発表 於：琉球大学

5. 「組踊『忠臣護佐丸』解説」国立劇場おきなわステージガイド3月号
2018年2月27日

5. 「読谷村各地に伝わる民俗芸能解説」国立劇場おきなわステージガイド
3月号 2018年2月27日

5. 「国立劇場おきなわ第 25 回民俗芸能公演 組踊『忠臣護佐丸』解説」於：国立劇場おきなわ大劇場 2018 年 3 月 3 日
5. シマ de シンポジウム「糸満組踊×しまくとうば」コーディネーター 沖縄県文化協会 2018 年 7 月 28 日
5. 「平敷屋朝敏～哀・愛しゃ～解説および新作組踊と古典組踊について」国立劇場おきなわ上演資料集（四十四）2018 年 7 月 18 日
5. 「新作組踊『太鼓の縁』解説・あらすじ」国立劇場おきなわステージガイド 12 月号 2017 年 11 月 30 日
5. 「『創作舞踊の会』解説」国立劇場おきなわステージガイド 12 月号 2017 年 11 月 30 日
5. 「組踊の『古典』と『新作』その流れと形式を考える」国立劇場おきなわステージガイド 12 月号 2017 年 11 月 30 日
5. 「組踊解説」平成 30 年度南城市地域会議・文化遺産めぐりコンサート事業「知る・見る・聴く地域の文化遺産で体験する本格組踊」主催：南城市教育委員会 2018 年 10 月 13 日・11 月 10・16・17 日於：南城市玉城垣花・知念久高・大里真境名・玉城新原
5. 「鎌倉芳太郎資料にみる戦前の琉球芸能」国立劇場おきなわステージガイド 7 月～12 月号 2018 年 7 月～12 月
6. 「知っていますか？しまくとうば」那覇市こどもみらい部主催特別企画研修 2018 年 1 月 22 日 於：那覇市役所 12 階研修室
6. 「琉球芸能史概説」県立芸大ハワイ大学等リカレント講座 ハワイ沖縄県人連合会館ホール 2018 年 3 月 23 日
6. 「組踊の鑑賞法①」県立芸大ハワイ大学等リカレント講座 曹洞宗両大本山ハワイ別院正法寺講堂 2018 年 3 月 24 日
6. 「組踊の鑑賞法②」県立芸大ハワイ大学等リカレント講座 曹洞宗両大本山ハワイ別院正法寺講堂 2018 年 3 月 24 日
6. 「近世琉球の舞台芸術をめぐる技術－舞台構造・装置・道具をめぐる－」沖縄県立芸術大学附属研究所文化講座“琉球・沖縄の技術史”（第 14 回）沖縄県立芸術大学附属研究所 3 階小講堂 2018 年 7 月 11 日
6. 「しまくとうばで伝える伝統」琉球放送「ウチナー紀聞」880 章 2018

年 7 月 15 日 11:00 ～ 11:30 (30 分)

6. 「近世琉球の組踊について」平成 30 年度 第 6 回 組踊保存会伝承者養成研修講座 2018 年 10 月 22 日 於：浦添「結の街」3 階大研修室
6. 「組踊について」糸満市生涯学習支援センター文化講座 糸満市生涯学習支援センター 2018 年 11 月 7 日
6. 「琉球の歴史と文化」第 27 回歴史・文化講座（文化編）沖縄県市町村職員研修講座 沖縄県市町村職員研修センター 3 階研修室 2018 年 11 月 28 日
6. 「琉球芸能史と組踊概説」第 27 回歴史・文化講座（文化編）沖縄県市町村職員研修講座 沖縄県市町村職員研修センター 3 階研修室 2017 年 11 月 28 日
6. 「聞く、見る、学ぶ 南城市と組踊」南城市文化講演会 主催：南城市教育委員会 2018 年 12 月 16 日 於：南城市役所 1 階大会議室
7. 「沖縄タイムス『ワラビー』琉球芸能紹介『沖縄タイムス』2018 年 1 月～12 月（毎月第二日曜掲載）
7. 劇評「御冠船踊と琉狂言」琉球新報 2018 年 3 月 14 日
7. 琉歌監修「日本テレビ皇室日記」日本テレビ 2018 年 4 月 29 日 6:00 ～ 6:15 (15 分)
7. 書評『しまくとうばルネサンス』琉球新報 2018 年 6 月 3 日
7. 取材記事「地方に息づく神と王の物語・神話 記紀から風土記へ」産業経済新聞（大阪）2018 年 8 月 25 日
7. 取材記事「初演 300 年へ組踊伝え継ぐ⑥」沖縄タイムス 2018 年 12 月 28 日

波平 八郎（教授、兼任教員）

- 1) 7. 「俳句彫刻の理論」、沖縄県立芸術大学開学 30 周年記念論集『芸術論の現在 沖縄からの発信』、平成 30 年 3 月
7. 看護教育における教養教育の実践的研究
琉球大学医学部附属病院看護部研修講師（7 月）
沖縄県立看護大学非常勤講師（4 月 -8 月）

奄美看護福祉専門学校非常勤講師（1月、6月）

沖縄県看護協会認定看護管理者教育課程セカンドレベル研修講師（10月）

麻生 伸一（講師、兼任教員）

- 1) 4. 「絵図からみる近世・近代初期の那覇・山川間航路」、「南西諸島における海上交通の復元的研究—「帆船の時代」の「歴史航海図」—」 科研研究会、沖縄県立芸術大学、2018年11月11日
4. 「王国末期の廟制について」沖縄民俗学会11月例会、沖縄県立芸術大学、2018年11月24日
4. 「摂政・三司官起請文について」琉球沖縄歴史学会12月例会、沖縄県立芸術大学、2018年12月1日
4. 「琉球沖縄の文化と鎌倉芳太郎」INTERNATIONAL SYMPOSIUM: Art of the Ryukyu Kingdom, チューリッヒ大学、2018年12月14日
5. 「「同治五年より同六年 評価方日記 下」解題」『国立台湾大学図書館典藏琉球関係史料集成』第5巻 2018年
6. 「系図・家譜の調べかた、読みかた」那覇市歴史博物館ギャラリー文化講座、那覇市歴史博物館、2018年3月11日
6. 「古琉球の外交と社会」「琉球史概説—御後絵—」「近世琉球の政治と文化」しまくとぅば実践教育プログラム開発事業リカレント講座、曹洞宗両大本山ハワイ別院正法寺、2018年3月23日～24日
6. 「技術者・職人と王府」沖縄県立芸術大学附属研究所平成30年度文化講座、沖縄県立芸術大学、2018年7月8日
6. 「古文書を読もう。」沖縄県立芸術大学附属研究所平成30年度文化講座、2018年5月7日～7月9日（全10回）
6. 「多良間の家譜について」、「古文書の島たらま」説明会、多良間島コミュニティ施設、2018年7月6日
6. 「首里城の座敷飾りからみる王府外交」2018年度沖縄県立芸術大学全教育センター連続公開講座「おきげい教養講座」2018年10月25日
- 2) 1. a 若手研究 (B)16K16909「近世琉球の冠船と琉球王権に関する研究」

(2016 年度～ 2019 年度)

1. b 基盤研究 (B) 16H03476「琉球史科学の基礎的構築に基づく近世琉球史研究」(2016 年度－ 2021 年度) 研究代表者：豊見山和行 (琉球大学)
1. b 基盤研究 (B) 18H00698「南西諸島における海上交通の復元的研究－「帆船の時代」の「歴史航海図」－」(2018 年度～ 2022 年度) 研究代表者：黒嶋 敏 (東京大学)

(3) 伝統工芸部門

新田 摂子 (講師、専任教員)

- 1) 2. 論文「Museum der Kulturen Basel 所蔵の沖縄織物調査報告着物編」『沖縄芸術の科学』第 30 号、2018 年 3 月、pp89-105
4. 研究発表「〈近代における琉球絣の産業化に関する研究〉について」沖縄染織研究会第 101 回研究会、2018 年 6 月 22 日、沖縄県立芸術大学附属研究所
4. 研究発表「スイスの Museum der Kulturen Basel 所蔵の沖縄織物資料の調査報告」沖縄染織研究会第 104 回研究会、2018 年 11 月 16 日、沖縄県立芸術大学附属研究所
6. 「王府から近代の織文化 生産体制 道具 布の種類」『琉球・沖縄の技術史』沖縄県立芸術大学附属研究所文化講座、2018 年 5 月 23 日、沖縄県立芸術大学附属研究所
6. 講演「Museum Der Kulturen Basel 所蔵の沖縄織物について」International Symposium Arts of the Ryukyu Kingdom、University of Zurich、2018 年 12 月 15 日
7. 移動大学 in 波照間「織り遊び」講師、2018 年 12 月 8 日
7. Museum Der Kulturen Basel での沖縄染織コレクションの調査、12 月 17 日～ 21 日

名護 朝和 (准教授、兼任教員)

- 1) 3. 型染屏風作品「青の境界」《染色回遊展 vol. 4》
沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館

2018 年 3 月 21 日～3 月 25 日

3. 型染屏風作品「青の境界」、
型染額装「久高の杜」「古典 菊窓絵模様白地型」
「八月の海」「古典 流水に草花貝文様藍型」
《名護朝和 展 - 型染め -》ギャラリー猫亀屋（大阪）

2018 年 9 月 15 日～23 日

3. 型染額装「デイゴと台風」《2018 臺灣・沖縄藝術大学交流展》
國立臺灣藝術大學 2018 年 10 月 24 日～10 月 31 日
3. 型染額装「古典 菊窓絵模様白地型」「久高の杜」
《沖縄県立芸術大学大学院 染分野グループ展 花色時》
vow' s space + cafe ギャラリー（大阪）2018 年 11 月 7 日～18 日
3. 型染屏風作品「青の中に緑の上に」《新匠工芸会展》
東京都美術館 2018 年 10 月 8 日～14 日
京都市美術館別館 10 月 18 日～22 日
6. 染織（紅型制作）
講師 平成 29 年度琉球王国文化遺産集積・再興事業報告会
「手わざを探る王国の美」沖縄県立博物館・美術館 3F 講堂
2018 年 5 月 27 日
6. 講師「森田永吉の足跡」琉球びんがた事業協同組合主催
てんぷす那覇 2018 年 11 月 13 日
7. ギャラリートーク「長尾紀壽展 - 沖縄四半世紀型絵染の世界 -」
佐喜眞美術館 2018 年 9 月 22 日
7. 「紅型教室」講師：《沖縄県立芸術大学移動大学 IN 波照間島》
2018 年 12 月 8 日
- 2) 3. 一般財団法人沖縄美ら島財団受託研究
琉球王国文化遺産集積・再興事業製作
「木綿花色地震枝垂桜紅型袷衣裳の模造復元製作」
本年度事業期間／平成 30 年 8 月～平成 31 年 2 月
内容／試作・本制作（裏側）金額（年額）／1,320,300 円

山田 聡（准教授、兼任教員）

- 1) 3. 9月「Memento mori series: 繭」
アジア現代陶芸交流展（韓国・弘益大学校現代美術館）
3. 10月「Memento mori series: 繭」
台湾・沖縄芸術大学交流展（台湾・国立台湾芸術大学）
7. 11月 かりゆし美術展 審査員

(4) 伝統芸能部門

高瀬 澄子（准教授、兼任教員）

- 1) 7. 書評「榎木亨著『日本近世期における楽律研究—『律呂新書』を中心として』」『音楽学』第64巻第1号 2018年10月 pp.72-74
- 2) 1. a 基盤研究(C) 課題番号26370102 「日本の律管」 2018年度0円
(1年間延長)
- 2) 1. a 基盤研究(C) 課題番号18K00135 「『歌道要法』の研究」 2018年度30万円(直接経費)

比嘉 いずみ（准教授、兼任教員）

- 1) 3. 劇団うない「新春公演」（具志川芸術劇場：燈ホール）「創作舞踊：エーク小」2018年1月7日
3. 国立劇場おきなわ主催「御冠船踊と琉狂言」（国立劇場おきなわ：大劇場）「女踊り振付作品：思羽」2018年2月10日
3. 第4回比嘉いずみの会 ～真南風さらめけば鈴なりど待ちよ～（国立劇場おきなわ：大劇場）演目：「本貫花」「諸屯」「花風」「潮風」「遊行流れ」「高平良万歳」2018年5月27日
3. 国際コンソーシアム協定連携シンポジウム（名桜大学：サクラウム・スカイホール）「鳩間節」2018年11月3日
3. 第1回 島袋 功 独演会「功謳」（名護市民会館：大ホール）「花風」「鳩間節」2018年12月16日
6. 沖縄県立芸術大学主催 「しまくとうば実践教育プログラム開発事業・

リカレント講座 in ハワイ」 内容：琉球舞踊実技「かぎやで風」「瓦屋」
／琉装「着付け」「結髪」「化粧」 場所：ハワイ州ホノルル／ハワイ沖
縄センター・曹洞宗寺院 2018 年 3 月 23 日～28 日

6. 平成 30 年度 教員免許状更新講習「琉球舞踊の概論と実技」（沖縄県
立芸術大学：大合奏室）2018 年 7 月 1 日
7. 対談「ハワイと沖縄 私たちのアイランドカルチャー（小西潤子&比嘉
いずみ）」発行／編集工房東洋企画「モモト vol. 35」2018 年 7 月発行
7. 沖縄県高等学校文化連盟主催「第 5 回 郷土芸能ソロコンテスト」審査
員（沖縄県立芸術大学：奏楽堂ホール）2018 年 6 月 10 日宜し
7. 琉球新報社主催「第 53 回 琉球古典芸能コンクール（舞踊新人部門）」
審査員（琉球新報ホール）2018 年 8 月 14 日～18 日

※『沖縄芸術の科学 第 30 号』『琉球・沖縄芸術の構造』正誤
正：第 3 回 4 月 19 日 西岡敏（沖縄国際大学教授）「うちなーぐちの構造」
以下、第 4 回照屋理、第 5 回波照間永吉…となる。

沖縄県立芸術大学附属研究所文化講座「琉球・沖縄の技術史」要旨集

第1回 琉球・沖縄の技術史研究の現状と課題

栗国 恭子（沖縄県立芸術大学非常勤講師）

1、「技術史」に必要な時間軸

技術史の構築するためには、二つの時間軸を視野に入れる必要がある。一つ目はA) 琉球・沖縄独自の政治軸を中心に捉えられる「時代区分」である。二つ目はB) 考古・民俗・工芸各分野で捉えられてきた各技術の展開・系譜などによる時間軸である。この二つの時間軸をわかりやすく表現するとA) が横割りの歴史とすれば、B) を縦割りの歴史つまり「横糸」と「縦糸」で織りなす琉球・沖縄の技術史構築が重要なのである。さらに、琉球・沖縄の独自の歴史時代認識を念頭に置きつつも、常にダイナミックに変化する世界史・日本史を視野に入れた比較する技術史を捉えることも必要になる。

2、「技術」と「技術史」について

「技術史」を学ぶ「技術」と「技術史」へ向き合う視座の確認をしておこう。「天工開物」などの研究で知られる三枝博音は、「＜技術の概念＞は技術の歴史の研究を通して、次第に明瞭になり、その意義が深められる」テーマであるとする。さらに「技術を技量（うで）というように狭く解釈したり、技術を道具や機械の全体というように考えたりするならば、技術史が成立することはあり得ない」とする。それは道具史や機械史のみでは技術史ではあり得ない事を意味している。技術史は「技術の発達の単なる記述」ではなく、「文化史と自然史との接触面」のところに成り立つ歴史記述である。「自然と人間とを媒介する過程」が重要で、その社会の人間の意識（自然観・美意識）を理解する事も重要である¹。

3、技術史研究の現状と課題→研究史

琉球・沖縄文化の「技術」研究の流れの概略を確認しよう。近代に入り1920年代には鎌倉芳太郎 美術・工芸の調査成果²や伊東忠太の琉球建築文化調査成果が質の高い「写真」資料と共に残された。1930年代には柳宗悦ら民藝一行の沖縄の民藝・工芸文化を幅広く記録紹介だけでなく、建築文化・石造文化へも注目している。そのほかにも田辺泰『琉球建築』（1937）の調査成果もこの時期である。

沖縄戦後から1970年代までは、大まかに捉えれば、歴史文献と上記の各研究の見解とモノと自身の記憶すりあわせの中で技術が語られる。その中でも特筆すべきは琉球政府文化財保護委員会編の『沖縄文化史辞典』（東京堂出版・1972年3月）で、戦後急速に変化する沖縄文化や生活様式の中で戦前までのモノや技術の情報が多角的に記録されている。

1980年代には琉球史の中で「技術」を捉える視野が広がった。日本・世界史・アジア史とクロスする琉球史の展開するこの時期に、那覇市史編集事業で高良倉吉らが技術や職人を取り上げた³。1980年代までの情報は、『タイムス大百科事典』（上・中・下）の項目に反映されている。こうした1980年代の成果は、当時の民衆の生活と労働の歴史をテーマに

した「技術の社会史」研究の盛隆が背景として生まれている。

1990年代にはいと、各市町村で考古発掘調査が活発になり、その具体的な歴史資料としてモノ（出土品）が各分野の研究に刺激を与えており、今日でもその成果は。さらに90年代は各市町村誌の編纂事業が活発になり、それぞれの地域の特徴ある歴史書が刊行されている。また同時に各博物館による展示によってモノからの情報も多くなった。世界史・東アジア史からの視点は共有され、考古・歴史・工芸・民俗分野での研究交流も多くなるが、「技術史」に特化した流れはまだ不十分であった。この時期には「首里城」復元（1993年）の関連技術は注目され資料発掘や研究も進んだ。さら琉球王国時代の外交文書「歴代宝案」翻刻事業も始まり、14世紀からの東アジアをめぐるモノ事情も「外交」の中で理解されるようになった。この時期には『中国科学技术史』上・下（東京大学出版、1997）などの文献も発行されている。

2000年代にはモノ資料の「科学」的分析より精密な情報が提示されるようになり、先史の「貝の琉球史」や、従来研究成果が乏しかった金属文化研究も充実してきた時期になる。

近年の2010年代では、各分野で前近代と近代の「技術」を意識する研究が出始め、研究課題も豊富に展開される。金属や漆芸研究で概論書（久保智康『日本の美術 533 琉球の金工』（2010年）や漆工史学会編『漆工辞典』（2012年）が刊行された。また2016年には、沖縄県による鎌倉芳太郎資料刊行（全7巻、沖縄県立芸術大学附属研究所編）、2017年に『歴代宝案』資料翻刻作業も完了し、基礎資料も充実してきた。今後の琉球・沖縄のより詳細な「技術史」研究・構築へ向けての資料利用が期待できる。

註

1. 三枝博音『三枝博音著作集』8・9巻参照中央公論社、
2. 鎌倉が残した資料は撮影から50年の時を経て1970年代に広く知られ、著書『沖縄文化の遺宝』（岩波書店）は1982年に刊行。
3. 『那覇市史 通史篇第1巻 前近代史』1985年、また那覇市史編纂事業では「家譜」資料収集も行われた。

第2回 近世における首里王府の技術と人（職人）—庖丁人の世界—

山田 浩世（沖縄県教育委員会）

料理は、それがどのような場面、どのような人物によって提供されていたのかを含めて見ることで、当時の社会や国家がおかれていた状況を垣間見せてくれる。重要な外交や交渉の場面で提供された料理は、時に外交的立場を演出する目的を担い用いられたため、当業者は製作にかかる技術の維持や導入に邁進した。

王府は、1667年に向象賢による布達の中で「庖丁」を士族の嗜みの一つと位置づけ習得を推奨していた。また、1725年に蔡温らは、士族による（庖丁人を含む）諸職への就任を推奨する政策を打ち出し、身分制成立後の早い段階で国が必要とする技能職を王府の組織

内に位置づけて保護する政策を展開した。

例えば、冊封使が来琉した際に庖丁人たちは、「五段」（一段は四皿からなる）の料理によって彼らを歓待したが、それはフカヒレ・ナマコといった俵物、ケラマジカや豚などの特産、海馬（ジュゴン）を入れた珍奇な料理などで構成され、柔順で教化に沐する朝貢国像を示すために用いられた。尚家文書「御庖丁人江新家譜被下候僉議抜」には、清や薩摩で料理修業に励み功績を残して士族にとりたてられた人びとの事例が記されているが、その過程を見てみると庖丁人たちは巧みに中日の技術を導入していた。また、の中で彼らは薩摩藩主などの求めに応じて唐料理やお菓子を提供していたが、薩摩側も他藩の人びととその場を共有し「異国」を従える自藩のイメージを喧伝する目的として利用してもいた（「琉球人舞楽御巻物」沖縄県立博物館・美術館所蔵）。

琉球における技術導入、とりわけ庖丁人たちの世界を見てみると、必要な技術は国家が奨励し、外との頻繁な往来を基礎に人材を養成することで素早い技術導入が図られていた。一方で必要な場面に応じて人材を採用する傾向が見られ、相対的に家業化を基礎とする継承制度よりも個人を基礎にした技術維持・流通が優位に展開する社会であったと言えるであろう。

第3回 東アジアの窯業技術と琉球

森 達也（沖縄県立芸術大学全学教育センター教授）

本講座では、琉球の窯業技術の系譜を知るために、中国を中心とした東アジア全体の窯業技術、特に窯の構造を俯瞰し、琉球の窯業技術の源流を探った。

まず、中国の窯の発展史を新石器時代から明時代にかけて概説し、中国華南で発達した龍窯（窖窯、単室登窯）が、朝鮮半島や日本の窯構造に大きな影響を与えたことを明らかにした。さらに、明時代に福建南部で誕生した連房式登窯（中国では横室階級窯と呼ぶ）の技術が中国各地に広がり、清時代には日本の九州地方やベトナムなど海外にも伝わった状況を説明した。

次に中国の瓦窯を紹介し、那覇の湧田で発見された丸窯が中国の瓦窯の系譜につながることを説明した。また、壺屋の上焼（施釉陶器）が連房式登窯、荒焼（壺、甕、鉢など）は単室登窯で焼成された状況と、中国の徳化窯をはじめとする福建・広東の陶磁産地では磁器は横室階級窯（連房式登窯）、甕・壺類は龍窯（単室登窯）で焼成した状況を比較し、製品によって窯を使い分けていることがほぼ一致していることを指摘したが、薩摩焼でも同様の使い分けがあることから、これが中国・福建省からの影響によるとは断定することはできないことも付け加えた。また、中国の横室階級窯（連房式登窯）や龍窯（単室登窯）は、基本的にレンガ積で構築されており、土築による沖縄の窯に直接的な影響を与えたとは考えにくい。連房式登窯という窯構造は、明時代の福建省で生み出され、アジア各地に伝播した可能性が高く、そうした影響が朝鮮半島や九州を経て琉球王朝に伝わったと考

えることができることを説明した。

最後に、壺屋の赤絵の技術に、中国で18世紀以降に盛行した粉彩の技術が導入されていたことを紹介した。

第4回 琉球・沖縄の窯業技術

倉成 多郎（那覇市歴史博物館）

技術とは伝達可能であり、学習による習得と経験の積み重ねによる習熟が可能な知的体系である。天才による直感的なひらめきを伴う創造行為とは大きく異なるところである。

それゆえ技術は移植と拡散が可能であるが、近世以前の世界においては多くの場合に人の移動を伴う。

豊臣秀吉による朝鮮半島への侵攻（文禄・慶長の役）の後、薩摩に留め置かれた朝鮮人陶工のうち3名が窯業技術の指導のため琉球に招聘される。彼らが生活していた薩摩藩苗代川の1620年代の窯跡遺跡である堂平窯の発掘調査から、沖縄に渡った朝鮮人陶工たちが身につけていた技術は無釉大型製品の作陶技術であった。

堂平窯では窯詰めの際に重ねて設置した焼物の溶着を防ぐ為に二枚貝を間に挟むことが行なわれる。琉球王国でも当初は二枚貝を使用していたが、やがて二枚貝よりいっそう入手し易い枝サンゴの使用に代わっていく。技術の在地化の一例である。

19世紀以降、生産されるようになった上絵付け技法は沖縄では赤絵と呼ばれる。『用姓家譜』仲村渠致真の履歴に、1838年に中国に留学し赤絵の技法を習得して帰国したという記述を見出すことが出来る。また明治期の窯業技術者である北村弥一郎は1911年に執筆した沖縄視察の報告の中で1875年に東京から赤絵技法の導入を行なったがその後途絶えたと記述する。発掘遺物または伝世する赤絵作品を検討すると、複数の赤絵技法が沖縄に導入される一方、その導入された技法のいくつかは途絶し工房間・世代間で共有されていなかった可能性が高い。琉球王国・沖縄県内での国産・県産赤絵への需要が少なかったことが原因と考える。

『歴代陶工家譜』の記述や、沖縄県工業指導所の技師たちの足跡をたどると、特定の技術を習得することで、地理的な移動が可能となり、また社会階層も上昇することが出来た。技術の習得とは、人を地理的・社会階層的制約から解放し様々な意味での移動を可能とさせるものなのである。

第5回 アジアと琉球・沖縄の織の技術―機をめぐる―

柳 悦州（沖縄県立芸術大学附属研究所客員教授）

織物とは、張力をかけた経糸に緯糸を組み合わせたものと定義すると、機（織機）とは、経糸に張力をかけ、経糸に緯糸を組み合わせる機能を持つものと考えることができる。

沖縄の機は、明治時代中頃から第二次世界大戦前までの間に、徐々に腰機から現在沖縄

で一般に使われている高機へと移行し、戦後の沖縄織物の復興は、ほぼ高機によってなされてきた。

沖縄の伝統的な織物は琉球王朝時代末期に完成したので、それは腰機によって織られた。沖縄の腰機は、傾斜式の機台を備えた天秤腰機で、二重天秤機構を備えた腰機もあった。傾斜式機台の天秤腰機は、韓半島から西日本に多く分布している。全国の博物館等に残されている傾斜式腰機を比較すると、機台の高さは日本本土から沖縄にかけて徐々に低くなっていくが、天秤腰機としては共通している。

琉球王国末期には、この天秤腰機を使って、緋織物をはじめ、組織・花織・花倉織・ロートン織等の組織織物が織られていた。組織織物を織るためには綜統が二組備わった二重天秤機構が有効だったと考えられる。また江戸時代末には奄美大島でも、読谷山花織に類似した紋織物が、経糸の下に紋綜統の備わる天秤腰機によって織り出されていた。

天秤腰機以外の機で織られた織物では、うるま市に伊波メンサーとして知られる織物がある。伊波メンサーは機台がなく箆もない腰機によって織られている。奄美でも10歳頃の少女の織り遊びとして同様な腰機があった。織物の基本原理が理解でき、大切な糸を無駄にしない工夫が込められており、伊波メンサーは沖縄の織物技術を知る上で貴重な存在である。

ムシロも経糸に張力がかけられた織物である。機枠に張られた経糸を開口し緯糸を打ち込む道具として、丸穴とスリット状の穴が表裏に交互に開いた開口棒綜統が一般的に使われてきた。多良間島と宮古島には表面だけに丸孔とスリット状の穴が明けられ、裏面は丸孔だけの半開口棒綜統がありとても特徴的である。

衣料用としては腰機が、その他の用途には別の構造の機が使われ、沖縄の織物技術文化を担ってきた。

第6回 王府時代の布をめぐる技術史の現状と課題

小野 まさ子（沖縄県教育委員会）

沖縄県には、芭蕉布、久米島紬、宮古上布、八重山上布等、各地域に伝統工芸品として織物がある。「大交易時代」に東南アジアや中国からの影響を受けた織物は、古琉球期より中国や日本への贈答品として利用されていた。しかし、この時期の史料は、伝承や織物リスト以外になく、その実態を知ることができない。

一方、1609年以降の近世琉球期には久米島や宮古・八重山島の織物は貢納布として税の主要部分となり、「御絵図」の利用など、上質な物を定数納めるという仕組みとして出来上がる。その中で織物の質や数量を取り締まる現場の役人の状況や、製作する女性達に課される苦労の様々な事例、そして王府による織物生産地方の疲弊改善策は「規模帳」などの史料で研究され、王府の理念と現場での実態のずれなどが明らかにされてきた。

上質品は、国王の着衣や中国への進貢品、薩摩藩や江戸幕府への贈答品となった。が、

それだけでなく、「大和御用布」として、薩摩藩を通して大和市場で商品流通していた。

近年、史料の詳細な分析や「尚家文書」など新史料の利用などにより、近世琉球においても、生産地以外で作られた真綿や苧麻糸、芭蕉糸などが利用されている状況や、貢納布では無い芭蕉布や木綿布が久米島・宮古・八重山でも生産され、一部は貢納布代替品となっていく実態や、大和好みの紺地上布の増産を奨励したり、薬剤利用の布晒しという新技術導入の試みなど、時期によって市場要求を意識した生産量増加や種類の変化、および効率化をめざした政策を行っていたことが断片的ながら明らかになりつつある。

裏付けとして尚家文君などで、小禄間切を中心に製作された木綿布「小禄布」の生産流通や那覇における商品としての芭蕉布などの織物生産など、やはり大和市場を意識している状況が明らかになってきている。一方、京・大阪・江戸での琉球織物流通に関しては、史料の所在も含めた研究は、まだ緒に着いたばかりであり、産地と市場両側面の総合的な研究が今後の課題である。

第7回 王府時代から近代までの織文化 生産体制 素材 道具

新田 摂子（沖縄県立芸術大学附属研究所講師）

琉球王府時代の織物生産の目的は、主に芭蕉布を中心とした自家用生産と貢納布生産に大別することができる。貢納布は、苧麻織物の上布、絹織物の紬、木綿織物などが生産されていた。貢納布生産が義務つけられたのは、久米島、宮古、八重山の3つの地域であった。つまり、王府時代の女性達は、自分たちの衣服として芭蕉布を生産し、加えて久米島、宮古、八重山の女性達は、租税として貢納布生産を行っていた。

王府時代の織物生産には、主に腰機が用いられた。素材は、琉球内で糸芭蕉、苧麻、木綿を栽培し、糸紡ぎを行い、また養蚕を行い織物としていた。模様は、芭蕉布には縞や格子、貢納布には縞や格子に加えて、緋織物が織られた。

このような王府時代の織物生産は、王府時代末から近代にかけて大きな画期を向かえた。なぜなら、織物生産の目的が自家用生産や貢納布生産から、商品生産へと変化したのである。それまで、王府に納める布であった貢納布は、明治36年に貢納布制度廃止後、納める布から商品として現金収入を得る手立てとなった。その結果、これまでの琉球における素材、機、緋技術などの織物技術に、日本本土からの新しい技術が導入された。

明治21年、沖縄本島と八重山に、高機が導入され、大正期には、特に商品生産を行っていた地域に広く普及していった。また、苧麻、絹糸、木綿糸は、島外、県外から糸を購入することも行われた。織物の模様は、明治末から大正初めに、絵図緋や締機の技術が導入された。これらの絵図緋や締機の技術で織られた緋模様は、県外移出向け商品であるため、より消費者である日本本土向けであった。このように、王府時代から近代にかけては、織物に関する目的が商品生産化したために、機、素材、模様が大きく変化したといえる。

第8回 近世琉球の絵画技法—現状と課題—

平川 信幸（沖縄県教育委員会）

膠と顔料を使った絵画は、「日本画」と呼ばれることが多いが、中国を起源にもち、東アジア諸国に広がっており、琉球・沖縄では独自の「琉球絵画」として発展を遂げた。

独自の絵画様式を学術的に説明するためには、絵画様式が展開される地域の文化や歴史などの影響を技法（技術）や画題、画家や支援者などの社会的な背景などから証明しなければならない。「琉球絵画」というジャンルは歴史的な研究が比較的に進んでいるが、技法（技術）や画題について、まだまだ分からないことが多い。

講座では、近世琉球期において、卓越した技術をもち、比較的に伝世品が残されている殷元良（座間味庸昌）を軸に、山水画における技術的な筆法の伝承と、伝殷元良筆の『程順則画像』から、琉球の絵画の描写の特徴について紹介した。

殷元良は18世紀に活躍した絵師で、中国に留学した呉師虔（山口宗季・神谷宗季）より絵を学んでいる。その後、殷元良の技術は呉著仁（屋慶名政賀）、慎思九（泉川寛英）、向元瑚（小橋川朝安）、毛長禧（佐渡山安健）と近世琉球期を通じて、琉球画壇の中核とその周辺の絵師達へと受け継がれていく。

殷元良が描いた山水画は、樹木の筆法、点苔を活かした崖や雪の影などの描写に特徴がある。こうした山水画における描写の特徴について、殷元良と呉著仁、慎思九の作品を比較し、樹木の筆法、崖や雪の影などの描写の技術が伝承していたことを説明した。

本講座の二つ目の話題として琉球の肖像画を取り上げた。琉球の肖像画は、正面性の構図など、東アジア諸国の肖像画と共通しながら、顔や衣装の描写など特徴的なものになっている。『程順則画像』が殷元良が制作したという伝承がある一方で、中国人によって描かれたという説もある。『程順則画像』と琉球で描かれた肖像画の描写を比較し、『程順則画像』が殷元良を含む琉球人の絵師によって描かれた可能性が高いことを指摘した。

山水画と肖像画を通じて、中国絵画の技術を導入し、変化する琉球社会の影響を受け展開していく近世期の琉球絵画について、技術的な側面から紹介した。

第9回 東アジアの中の琉球金属技術史研究の現状と課題

栗国 恭子（沖縄県立芸術大学非常勤講師）

はじめに

今から13年前の2005年度開催された沖縄県立芸術大学附属研究所の講座「琉球王国と金属文化」（全10回）は、従来の歴史・考古・民俗・工芸・文学研究で議論が少なかった＜金属文化＞テーマを取り上げた画期的な企画であった。同時に研究の取り組みの当時の状況の確認がなされ、この10年で飛躍的に研究成果がでたことになる。

1、2005年～現在の金属文化研究状況

今回は、13 年間の研究成果（以下＊文献）をもとに「金属文化」のあり様と今後の課題を確認したい。

まず、「沖縄県金工品関係資料調査」（沖縄県 2003－2007）によって、古琉球から近世期における、鉄製品を除くある程度の基礎資料（銅鏡、甲冑、刀剣、飾金具、仏具、供養具、装身具、酒器など）が確認され、同時期に展示会や講演会など様々な活動が展開している。金工品の銅鏡、甲冑、刀剣、飾金具、仏具の分野は、日本美術の中における沖縄金属文化の特徴が示され、供養具、装身具、酒器、東道盆の資料に関しては、琉球と東アジア（中国）との交流関連を示す資料が多い事が確認されている（『沖縄の金工品関係資料調査報告書』2008）。

その他にも久保智康「故宫博物院蔵の金工について」沖縄県立博物館・美術館編『中国・北京故宫博物院秘蔵 甦る琉球王国の輝き』沖縄県立博物館・美術館、2008）、『日本の美術 533 琉球の金工』ぎょうせい、2010。久保智康編『アジア遊学 134 東アジアをめぐる金属工芸』勉誠出版、2010。上里隆「文献資料からみた古琉球の金工品—武器・武具の分析を中心に—」『アジア遊学 134 東アジアをめぐる金属工芸』勉誠出版、2010。栗国恭子「近代沖縄の金属文化—失われつつある技術と向き合う思考—」（『沖縄文化』2010）、栗国恭子「沖縄の金属文化のあり方—鉄・金・銀・銅・錫—」2008）。朝岡康二「宮古・八重山の『鍛冶例帳』からみる材料鉄と鉄器加工技術」『雑器・あきない・暮らし—民俗技術と記憶の周辺—』慶友社、2011。

2、古琉球期 梵鐘—何故尚泰久は沢山の梵鐘を製作したのか—

琉球の金属製品の中で 2005 年以前の研究（杉山ほか）段階で、製作年や技術・技術の系譜について確認済である資料が梵鐘（15 口現存）である。今回の新たな視点は、梵鐘を多く製造した時期の王・尚泰久・尚徳王・尚真王の外交実態（15 世紀～16 世紀）を「歴代宝案」から確認し、東南アジア・東アジアとの交流を踏まえて、室町幕府と梵鐘製作鋳物師の領内・大内氏の関係を確認しながら、従来の認識の枠を広げて新たな認識を提供する。

3、第二尚氏 尚真王の時代の金属文化→独特の金属文化

琉球は、社会身分を金属の簪（素材・形状）で表現する制度を持つ。16 世紀初めから約 300 年その制度は存続し、琉球国の人々（男女）の多くが、個人の装飾品ではない制度下された中で日本の技術影響を受けながらも琉球製の独自の金属製品を身につけていた。それは独特の感覚が 300 年以上続いている。

今回の講座では、18 世紀の『琉球国由来記』や『球陽』の歴史的記述の内容と、調査された現存する資料（尚真王代の簪：鴛鴦・獅子、神女の簪）との間で不整合があることを確認した。今後は歴史記述の信憑性について十分配慮する必要がある。現存する金工品の最高技術で製作された聞得大君御殿黄金簪についても再考すべき課題（モチーフ及び形状、製作年代）が複数確認された。さらに近世期の王・王妃の簪は鎌倉写真で確認できるものの戦後流出文化財として行方は不明であり、多くの課題が残されている。

4、金属製祭祀儀礼用酒器—古琉球からつながれたものと王府のものづくり体制—

金属製の祭祀儀礼用酒器は、王家に伝わる道具、その影響を受け琉球各地に広まった道具も多く現存して、1990年代から調査は行われている（栗国・久保ほか）。中国系の儀礼用酒器（形状・素材・技術）は古琉球期から耳盃・錫瓶を使用し、その後は琉球で製作され近世期には、王府内の祭祀儀礼の道具として定着した。

王府担当奉行の下で金工職人が担当する金工文化の構造は2005の講座でも確認したが（栗国担当）、今回は現存品より古い王家所蔵資料の写真（鎌倉写真）からその変遷を探り、王府儀礼の「三飾り（美御前御揃）の金属（銀・銀）製酒器の16世紀～19世紀時代の特徴を確認する。

第10回 近世琉球の医療技術—どのように医の知識・技術を修得したか—

勝連 品子（（一財）沖縄美ら島財団）

本講座では、近世琉球において医師（医療技術者）たちがどのように医に関する知識・技術を修得したのかという問題を取りあげ、『球陽』や首里王府の布達文書、医師の家譜や役職に関わる口上覚などの史料をもとに、医道稽古の様相、王府の医療政策・医師養成のありかたについて解説した。

近世の日本および琉球には、現代の医師国家試験に類するものや免許はなく、琉球においては、医師を養成する専門の教育機関も存在していなかった。医師を志す者は、まず国内で活動する医師と師弟関係を結んで稽古（修業）を行い、さらに薩摩あるいは中国（主に福州）へ赴き医道を学び研鑽をつんだ。これを「医道再伝」「医業再伝」と称し、王府は国外での稽古を人材育成の方法としてシステム化した。

王府は18世紀以降に医道の奨励策をとる一方で、国外における稽古については条件を付し、師匠や医官らが人柄・器量を吟味して推薦した稽古人について、渡海の許可を与えた。薩摩へ赴いた稽古人・医師の家譜には、師匠の名前とともに、「大医」「大医生」「江戸府大医」「奥医師」など藩医であることを示す肩書きが記載されていることがある。さらに江戸時代の医師の名鑑である「江戸今世医家人名録」や薩摩の家臣団の人名録である分限帳には琉球人の師匠となった医師の名前を見出すことができ、江戸の薩摩藩邸・蔵屋敷に詰めた藩医も確認できる。以上の記録から、藩医を務める優れた師匠のもとで、学習していたことが推察される。稽古人らは、薬種の製法・配剤を学んだり、師匠に随行して病家を見まわり患者の病症や脈の判断など臨床経験を積んだ。なかには流行病への対応のために種痘の方法、牛痘の「植付見様」などを学んで帰国する者もいた。福州における医道稽古については不詳なところが多いが、中国語会話のテキストである『学官話』には、中国人の師匠と琉球の医道稽古人の問答が収録され、その内容から医学書の読解を中心に学習が行われていたことを垣間見ることができる。

修業を終えた稽古人、あるいは数度の再伝によって研鑽を積み新たな技術を身に付けた医師たちは、王府の医官＝公的な医師として登用され、王城内のみならず、旅役の附医者

や、諸間切・諸島での流行病への対応、薩摩役人の病氣治療、漂着者の治療など様々な場で活動し、さらに後輩医師の育成にも携わるなど、習得した知識・技術を社会へ還元しながら、医業を営んでいった。

今後さらに王国時代の医の技術的な面を追求してくためには、久米島や八重山などにのこる医書・養生書の分析や、『伊江親方日々記』に記された家庭での医療や病への対応などを見ていくことも課題として挙げられることを述べ、講座を終えた。

第 11 回 近世琉球の船舶—造船技術の現状と課題—

高良 倉吉（琉球大学名誉教授）

個別的な調査・研究の成果はあるものの、琉球造船史を系統的・体系的に究明した研究者はいない。そのことを承知のうえで、断片的な事例を紹介したい。

対外関係や国内統治を実現するために、近世琉球には様々な船舶が存在し、その運用による多様な海運状況が展開していた。海運に連動する問題としては造船所（すら所）や操船・航海技術、海事行政、海事信仰、船体の構造と積載スペース、安全対策、船中生活などをめぐる多様な検討テーマが存在する。その問題群の中から、地方行政の運営に不可欠なものとして位置付けられていた公用船、すなわち地船の建造・修理の問題に焦点を絞りたい。

宮古地域の特別行政区であった多良間には、五反帆多良間船や四反帆水納船、四棚船、津口用舟など多くの地船が存在し、目的に応じて使い分けられていた。『多良間往復文書控』の 1832 年 1 月の記事によると、多良間側は四棚船＝水納用船を新造するために、宮古島の蔵元に対して、船の骨格を構成する松材と船釘に用いる鉄素材の支給を求めている。また、『多良間往復文書控』の 1844 年 8 月の記事によると、台風で傷んだ五反帆多良間船の修理のために、石灰と桐油の支給を蔵元に要請している。

この事例から浮上する点は以下の通りである。地船の構造材としてリュウキュウマツが使われたこと。龍骨に相当する軸材に棚と呼ばれる板材を剥ぎ合わせて船体を組んだこと。鉄材を鍛冶処理して船釘などの固定具に用いたこと。船体の剥ぎ目または目地に桐油で溶いた石灰を塗布したこと。注文品にマスト（檣木）や楫、甲板、帆、綱などの品が入っていないことからそれらは島内で調達したと推定できること。多良間側の注文に応ずるだけの船材を蔵元が備蓄していたこと。公用船としての地船体制を維持するための措置が講じられていたこと。そして大切な問題は、地船の建造や修理に対応できるノウハウを多良間側が備えていたこと、である。しかしながら、多良間にはこのことに関する伝承が伝わっていない。

多くの分野の専門家を組織し、琉球造船史を本格的に解明するための共同研究は今後の課題として残されている。

第 12 回 近現代沖縄の造船技術

前田 一舟（うるま市立海の文化資料館学芸員）

我が県下において木造船やその造船技術に関する研究は島袋源一郎の「船に関する土俗」（1931 年）に始まり、その後、東恩納寛淳や伊波普猷、名嘉真宜勝、喜舎場一隆、野口武徳、北見俊夫、上江洲均、小野まさ子、川崎晃稔、板井英伸等の研究が進められてきた。そのなかでも伊波は『日本文化の南漸—をなり神の島続篇—』（1939 年）のなかで『おもしろさうし』と史料等から中世琉球の海上交通のルート、船の発達史の可能性を導いた。しかしながら戦後の沖縄文化の研究が盛んになりながらも、とくに海洋文化の研究は少ない状況であった。また、技術史の観点からも県や市町村の文化財の指定になった件数は市 1 件のみで、伝統工芸の技術者よりも明らかに関心度が低い現状である。

『おもしろさうし』巻十三の 792 の歌詞にある「はぎて」は船大工を意味し、板と板を剥ぎ合わせる技術をもつ職人であった。その技術は本州・九州の和船に共通し、福建省泉州市・福州市、台湾基隆市の木造船等と比べても、琉球の木造船や本州・九州の和船に欠かせないものであった。しかも剥ぎ合わせる技術の木殺し、摺り合わせの作業はタナ、シキと呼ばれる船の構造を生み出すだけでなく、技術の発展に寄与した造船技術であった。とりわけ、近現代の沖縄において親子 4 代以上に渡り技術伝承してきた棟梁・越來治喜氏とその手元・越來勇喜氏は大きさに関係なく多種多様な木造船を建造する。とくにマーラン船は中国大陸や日本本州の木造船と違い、その船体が横断面で丸み帯びながら、船型の外板が優美な曲線をもつ点に特徴がある。それは外来の造船技術だけでなく、輸入材の質や量などの影響も受けながら、従来の技術をもとに進化した造船技術と考えられるだろう。

したがって、本講座で紹介した近現代に残る造船技術は中世の要素を含みながら、大航海時代に活躍した西洋の木造船との比較も検討しなければならないと思われる。

第 13 回 琉球漆工技術研究の課題

安里 進（沖縄県立芸術大学附属研究所客員研究員）

1、漆工技術研究と漆芸文化財の修復・復元

琉球の漆工技術研究の課題について、漆を塗った漆芸文化財の修復・復元という視点から考えてみる。ここで言う「漆工技術」は、漆塗りの技法だけでなく、指物や挽物などの木工技術や道具の形、描かれている文様など、漆芸品として完成するまでに要する全ての技術や要素である。



琉球の漆芸文化財には、椀・盆などの漆器類の他に、漆塗りの扁額もある。また、建造物にも漆は塗られている。首里城正殿は、外壁や内装に漆が塗られていて「最大の琉球漆

器」と言われている。これらの漆芸文化財は、長年の使用による損傷、経年劣化、虫害、風雨と日射に曝されるなどして痛んでいて、修復しないと後世に残せないものがほとんどだ。また、沖縄戦で多くの漆芸品が焼失したため、戦災文化財の復元も重要な課題である。首里城正殿は復元された戦災文化財の一つだ。こうした漆芸文化財を修復・復元するうえで不可欠な基礎研究が漆工技術研究である。

2、琉球の漆工技術で修復・復元する必要がある

琉球の漆芸文化財の修復・復元も、日本や中国の漆工技術を使えば良いというものではない。漆芸文化財の修復・復元は、それぞれの国、地域の漆工技術をふまえて行う必要があるからだ。

日本の漆工技術は、縄文時代から連続と発達してきおり、芸術的にも優れた漆芸品が数多くある。漆芸文化財も道具類から神社仏閣などの建造物にいたるまで数多く伝世されており、修復技術も高い水準にある。また、中国の漆工技術も唐の時代から多種多様な技術があり、現在に至るまで漆工技術の水準は高い。

たしかに琉球の漆工技術は中国・日本の影響を受けてきた。しかし、両国の影響を受けながらも独自の漆工技術を生みだし、琉球漆器を世界的ブランド品にまで高めた歴史がある。

アジア各地と比較した琉球漆工技術の大きな特徴は、多彩な漆芸技法にある。堆錦、螺鈿、沈金、箔絵だけでなく漆絵、密陀絵、堆朱などもあり、桐油朱塗や下地看板塗といった未解明の技法もある。これらの技法は時代によって流行り廃りがあつた。漆器に描かれる文様もそうだ。16～17世紀には、朱漆、緑漆、黒漆、白密陀などに沈金や螺鈿、漆絵で加飾され、文様は花鳥図が多いが、18～19世紀には黒漆に螺鈿による山水樓閣図が多くなり、堆錦や煮貝といった新たな技法も登場する。デイゴやハイビスカスなど沖縄の風物を題材にするようになるのは、近代になってからだ。

3、現在の伝統的漆工技術だけでは適切な修復・復元はできない

琉球漆芸品の修復・復元は、現在に伝わる伝統的な漆工技術で行えばよいのかというところでもない。漆工技術はそれぞれの国・地域の歴史のなかで発達し変遷してきたので、修復・復元する文化財がどの時代のどのような技術で製作されているか見極めたうえで修復・復元する必要があるからだ。

琉球の漆工技術も時代とともに変化してきた。現在に伝わる伝統的漆工技術は、明治以後の技術であり、琉球国時代の多彩な技術の多くが失われ、あるいは変質している。だから、琉球国時代の漆芸品の修復・復元は、現在の伝統的漆工技術だけではカバーできない。琉球国時代の漆工技術の解明が不可欠である。

4、琉球漆工技術研究の課題

琉球の漆工技術研究は、漆芸文化財を修復・復元するうえで不可欠な基礎研究だが、多くの研究課題を抱えている。ここでは、次の3つの課題をとりあげたい。

- ① 琉球の漆工技術は、琉球史の中に位置づけてとらえる必要がある。首里王府は、貝

摺奉行所を設置して琉球漆器の生産に強く関わってきた。こうした歴史をふまえると、琉球の漆工技術研究は、琉球の社会、行政、外交などの動向との関係を念頭に考える必要があるだろう。例えば、王府の工芸品を製作する部署は、1733～45年に大きな組織再編と施設移転が行われた。貝摺奉行所では王府直営工房での製作から民間請負へと転換している。こうした王府の組織再編が漆工技術に大きな影響を与えたと思われるが、そうした視点からの分析はまだ行われていない。

② 道具類などの漆芸品に年代を与える編年研究を深める必要がある。漆芸文化財は、時代とともに変化してきたが、ほとんどの漆器には年代情報がない。そのため、琉球漆器の年代把握の現状は、16～17世紀、17～18世紀、18～19世紀といった200年単位でしか設定できていない。しかもその年代設定は、個々人の経験による洞察力に頼っているところが多い。琉球漆器の年代設定については、荒川・徳川氏が名著『琉球漆工芸』で、具体的な特徴を指標にした年代設定の作業を行っているものの、その後そうした研究はあまり進展していない。

③ 漆芸文化財というモノを分析するためには、理系的な思考・発想が必要だ。漆芸文化財は、考古資料と同じ「沈黙資料」であり、文献史料のように自ら語ることはない。したがって、その分析には理系的思考と理科学的分析が有効である。そのためには、個人的な経験に裏付けられた洞察力ではなく、他の研究者と情報を共有したうえで議論できる数量的分析であり、これをいかに定量的に行うかであろう。

第14回 近世琉球の舞台芸能をめぐる技術—舞台構造・装置や道具をめぐる—

鈴木 耕太（沖縄県立芸大附属研究所講師）

近世琉球で芸能が供された場は様々である。代表的なものは冊封使を招いて行われる「仲秋宴」「重陽宴」などの宴である。首里城正殿の御庭に仮設舞台を建て、冊封使と国王は北殿から観劇する。当時の舞台図から確認すると3間四方の正方形の舞台に、橋掛りがついている。楽屋と地謡座は幕の後ろにある、そして、舞台中央には「銘苅子松」と呼ばれる本物の松の木が据えられ、舞台空間を構成しているという事がうかがえる。この舞台は、明治の芝居小屋でも踏襲され、そして、国立劇場おきなわでは、舞台の一边を1間伸ばした4間四方の舞台を採用している。

しかしながら、近世の資料から、首里城正殿以外での芸能の上演の場合、正方形ではない舞台での上演が確認できる。このことを考えると近世においても舞台の構造は必ずしも統一されていなかったことがうかがえる。また、躍奉行は仕立物方に舞台制作を依頼しているが、仕立物方の資料が不明であり、どのような者たちが舞台製作に携わったのかは、今後の資料の発見を俟たねばならない。

近世における舞台道具および衣裳は、琉球国内で調達するものと薩摩に発注するものと大きく二つに分けられる。注目されるのは大鼓の皮、輪がね、大鼓と小鼓のしらべ緒、そ

してオンの踊用の団扇を薩摩へ発注している。このことから、現在琉球古典音楽で用いられている太鼓が、近世では異なる楽器を用いていたということ、さらに現在では女の用いる団扇は唐団扇となっているが、近世は大和の団扇を用いていた、という事がわかる。

琉球国内で調達、製造される小道具は、金属関係の物が鍛冶奉行に発注されていることがわかる。しかしながら、金属製品以外の小道具の発注先はわからない。さらに、おのの着る踊衣裳は、仕立先が見られないことから、各踊人数で製作することが慣例であったと思われる。

躍方日記やその他の資料を見ると、時代によって決められた予算の中で、各時代の躍奉行が柔軟に対応していることが見えてくる。今後は他の奉行の資料と照らし合わせ、縁の下の力持ちである舞台を支える技術を検討していきたい。

第 15 回 職人と王府

麻生 伸一（沖縄県立芸術大学全学教育センター准教授）

本報告では、職人と王府の関係を、王府による職人処遇の実態解明、職人の社会的地位（あるいは生活）向上志向と王府制度との関わりから考察する。具体的には①技術の導入、②技術の運用、③技術の継承を報告の柱とし、そこから近世琉球の技術（文化）の成立背景を考えてみたい。

①技術の導入では、筆結い、製糖などの技術導入事例を挙げ、先行研究を踏まえて王府に「国用」を基準とした人事評価システムが存在したことを確認した。

②技術の運用では、『琉球国由来記』（18世紀初）と『職制秘覧』（19世紀中頃）にある王府所属の職人一覧の比較から、近世を通した王府所属職人の職務の多様化と雇用人数の段階的な減少を指摘した。また「夏御襦子御仕立之時日記」（1863年）にある国王衣裳修理に携わった職人集団を取りあげ、王府所属職人をトップとした組織の存在を想定した。

ほかにも「納殿染賃例」（1793年）、「細工人賃金規定」（1870年）では、諸細工人と日雇いについて、王府委託業務の技術料と王府による市場価格の設定を確認した。

③技術の継承では、江戸立、冊封時などの行列音楽（路次楽）で使用される吹奏楽器である哨呐（すおな）の演奏者から、演奏者と王府の関係を考えた。18世紀に王府は、哨呐は「琉球の飾り」（「謹言上」1731年）となる技術で、「唐ではもはや伝承が絶えており琉球のみに伝わっている」（「口上覚」19世紀頃）と認識されていた。いっぽうで、哨呐を演奏できる者は1731年には五人のみで（「諸役増減」）、担当者不在となる恐れがあった。そのため、王府は給与のある哨呐役を設置し哨呐の技術継承を企図している。しかし、哨呐役の設置後も演奏者の確保が維持された訳ではなかった（「仰渡写」）。そのため王府は演奏者の関係者からの要請のもと、哨呐役の待遇改善を図っていった（「覚写」18世紀頃）。ここから、王府の外交上演奏者が必要という思惑と、演奏者の演奏技術を習得すると成り上がる思惑は合致していない状況が見いだせる。つまり、役職設置・評価をめぐっては、王府と職人とのあいだに駆け引きがあったといえる。